

岡田俊裕：日本地理学人物事典 近代編 1 原書房，2011 年 12 月，482 ページ，A5 判，定価：6,800 円（税別），ISBN978-4-562-04710-9

本書は、高知大学名誉教授岡田俊裕氏による『日本地理学人物事典』（全 5 巻）中の一巻である。全巻の構成は近世編、近代編 1・2、現代編 1・2 からなり、現時点で近世編と近代編 1 がすでに刊行されている。筆者の人物事典の構想は、すでに 3 年前に高知大学の紀要に発表された論文のなかで、各地理学者に関する参考文献目録とともに示されていた。その後、本書のダイジェスト版とでも言うべき文章が近世（42 人）と近代（15 人）の 2 回に分けて発表された。それに大幅な増補を加えたものが、このたび相次いで上梓された本事典の近世編と近代編である。その予想を超える浩瀚さは、同じく地理学史を研究する評者をして深い畏敬の念を抱かしめずにはおかない。先人が残した多くの著作と真摯に向き合い、格闘した著者の苦労が、ひしひしと胸に迫ってくるからである。学界初となるこの本格的な人物事典は、1970 年代から 40 年近くにわたって近代日本の地理学史を人物中心に研究してきた同氏だからこそ成し得た労作であり、真に画期的な成果と言ってよい。

内容の紹介に移ろう。凡例（9-10 頁）とあとがき（459-461 頁）によると、この近代編 1 では、1830 年代から 1893 年（明治 26 年、日清戦争の前年）までの間に生まれ、「近代地理学の『構築』へ向けて奮闘した」57 人の「地理学者」がとりあげられている。そして、各人について、伝記的事実を踏まえた上で著作物の内容を分析する、

いわゆる「伝記・著作物的研究（個人史的研究，biobibliographical study）」に基づいた記述がなされている。また、「各人の業績の地理学（史）的意義，学界や社会に与えた影響」についての言及もなされている。その効用は、各「地理学者」の置かれた「勉学環境」や「仕事環境および社会状況」といったコンテクストと、そのなかで生み出された業績の内容・意義の概要を我々に把握しやすくしてくれた点にある。

本書は人物を生誕順に収載している（12-458 頁）。その理由は「通読すると、地理学史の流れにある程度接近できる」からとされている。収載人物の内訳は、次のとおりである。1830 年代生まれは、福沢諭吉、村田文夫、内田正雄、久米邦武の 4 人。40 年代生まれは、河田 鼯、大槻修二の 2 人。50 年代生まれは、松島 剛、小藤文次郎、坪井九馬三の 3 人。60 年代生まれは、野口保興、内村鑑三、新渡戸稲造、矢津昌永、志賀重昂、吉田東伍、山上万次郎、田中阿歌麿の 8 人。70 年代生まれは、山崎直方、佐藤伝蔵、小川琢治、井上長太郎、喜田貞吉、牧口常三郎、小林房太郎、中目 覚、岡田武松、大関久五郎、小田内通敏、柳田国男、石橋五郎、大谷光瑞、芦田伊人、西山栄久、富士徳治郎、藤田元春、西田卯八の 19 人。80 年代生まれは、西亀正夫、寺田貞次、野口保市郎、西田与四郎、田中館秀三、三澤勝衛、馬場鉄太郎、田中秀作、田中啓爾、東木龍七、高橋純一、内田寛一、今和次郎、石井逸太郎の 14 人。90 年代生まれは、辻村太郎、浅井治平、金尾宗平、綿貫勇彦、小寺廉吉、佐藤保太郎、石川栄耀の 7 人である。

この一覧を見れば、次のような疑問が生まれても不思議ではあるまい。果たして柳田国男や今和次郎などは、「地理学者」と言えるのか、と。しかし、実はここにこそ本書の特色があるのである。著者は「地理学者」を、「地理学的な業績を豊富にあげた人物」と定義する。つまり、本書という「地理学者」は、大学や高等師範学校の地理学教室で専門的な課程を修めたり、職務についたりしていた狭義の地理学者のみにとどまらない。およそ「地理学的な業績」を挙げたと筆者自身

が認定した人物ならば、その専攻分野や職務などにかかわらず、広範囲にとりあげられているのである。その反面、あとがきに示された60数人は、構想当初はとりあげる予定であったものの、「改めて各人の業績内容を検討した結果」、本書への収載が見送られた。そのなかには、河井庫太郎や石川三四郎など、他の地理学史研究者による専論が存在する人物に加えて、著者がかつて編集した『日本の地理学文献選集』（全26巻）に著作が収録された人物も含まれている。

そうすると、「かなり注意を払った」という「本書でとりあげるべき人物の選択」は、著者独自の地理学史観に基づくものと考えざるを得ない。では、それはいかなるものなのか。以下では、本書収載の「地理学者」の特徴を分析することにより、著者の地理学史観を探ってみることにしよう。

その際、手がかりとなるのは、各「地理学者」についての記述である。それは基本的に次の7つの項目から構成されている。すなわち、①肖像、②「記述内容の要点」、③キーワード、④本文、⑤著作、⑥参考文献、⑦「各人が描写した提示した地図や図像」（原則として一点）である。このうち、「地理学者」の特徴を知る上で重要なのは②④⑥の3項目である。②⑥④の順に紹介することにしよう。

②は100字から150字余りの短文だが、主たる研究領域や主要著書などを一目で把握することができる。ここで注目されるのが、おもに冒頭に記された各「地理学者」の位置づけである。具体例を挙げると、著者は小川を「地学者・地理学者」、金尾を「地理教育実践者で地理教育・郷土地誌の研究者」と、それぞれ位置づけている。およそ地理学に携わる者で全く教育活動に従事しない者も少ないと思うが、本書収載の「地理学者」には、実は金尾のように「地理教育（実践）者」、もしくは「地理教育研究者」として活躍したとされる人物が多数（約3割）含まれている。この点から、著者の地理学史観は地理教育を重視したものであることが推察される。

⑥には追悼文や本人の回想録を含む例も見受けられるが、文献数の多寡は概して、その人物に関

する従来の研究の活発さの程度を表しているといえてよい。最多は三澤（42）であり、以下、志賀（35）、牧口（33）、山崎（27）、小川（26）、辻村（24）、田中啓爾（20）、小田内（22）の順である。文献数10-19は11人、それ以下は38人である。その中で文献数が3以下で、これまでほとんど研究のなかった13人（村田、松島、井上、小林、西山、野口、東木など）に注目してみると、うち5人がおもに地理教育の実践・研究を担った文検（文部省中等学校教員検定試験）合格者であることが判明する。この点からも、著者の地理教育重視の姿勢が理解できよう。

④では「キーワードなどの重要項目は太字」で表記する工夫がなされている。この点は近世編と同様だが、近代編は「各人の学風を知るうえで避けて通れない作業である」との理由から、「著作の読み込みに力を入れた」結果、「叙述がやや込み入ったものとなった」と著者は言う。「必要に応じて」行われた「各著作物からの引用」がそのおもな原因とみられ、近世編の記述との大きな相違点になっている。ただし、引用は従来研究の進んでいない人物に多く、前述の参考文献数で上位に位置する人物には少ない傾向がある。つまり、まだ評価の定まっていない「地理学者」について叙述する場合、著者は資料の提示・紹介も兼ね、できるだけ本人の言葉で語らせようと意図したものと見られる。そのように見るなら、「込み入った」叙述は、本書の長所とも言えるのである。本文の分量は、文字のみの頁を基準として計算すると、松島、野口、山上の3人が8頁、田中阿歌麿、小川、大谷の3人が7頁、内田、久米、矢津、志賀、山崎、小林、小田内、辻村の8人が6頁である。以下、4-5頁が15人、3頁以下が18人である。分量の多い14人のなかには、山崎、小川、辻村というアカデミー地理学の代表的人物とともに、②の位置づけで「地理教育」の文字が入る6人、文検合格者3人、そして一般に地理学者と認知されていない久米や大谷が含まれている。この点も注目してよいだろう。

以上の検討から、人物選択の背後にある著者の編集方針は、次のように集約できるだろう。

すなわち、他分野の担い手であっても、何らかの「地理学的な業績」を挙げた人物であれば、「地理学者」として捉え直す。加えて、文検合格者など地理教育分野で活躍した人物に積極的な評価を与えることである。このような編集方針、言い換えれば地理学史観は、かつての著書『日本地理学史論』『地理学史』に見られた、アカデミー地理学を中心とするそれとは若干相違する。では、今回の新たな地理学史観に基づく本書を通して、著者はどのような近代日本地理学史像を提示しようとしているのだろうか。しかし、残念ながら、本書には著者の地理学史観や学史像について論じた序文がなく、その点については測りかねるのである。

残る①③⑤⑦にも触れておこう。①は、村田、井上、石川を除いた54人のものが掲載されている。③の数が最も多いのは山崎の8語、最少は馬場と高橋の2語である。人物によって随分と数の開きがあるようだが、3-5語の人物が四分の三を占めている。ただ、キーワードの付け方はやや問題があると言わざるを得ない。なぜなら、人名、書名・雑誌名、学校名、職名、学会名、国名・地域名、研究分野、研究手法、研究概念から、「脱亜入欧」「ナショナリズム」「文明開化」といったものまで、あまりにも多種多様な語句が含まれているからである（なかには「地理学研究留学」なる聞き慣れない語句もある）。また、よく似た語句が複数見受けられ、不統一な感が否めない（「文検」と「文検（地理科）」、「現地調査」と「実地踏査」など）。キーワードについては、ぜひとも再考を願いたい。⑤は、「各人の著作類のうち、入手ないし閲覧しやすいもの」を指し、

同欄には全集や前述の文献選集、NDLの近代デジタルライブラリーに収録された著作に関する情報が記されている。この情報は⑥とともに、本書の資料的価値を高めている。⑦は、西田卯八を除いた全員のものが掲載されている。種類は写真やスケッチもあるが、主題図が大半を占めている。

五十音順の人名・事項索引（463-482頁）は大変充実したものであり、また巻末には、近代編2収録予定の人物一覧（1895年から1905年までに生まれた51人）が予告されている。

以上紹介してきたように、本書は瑕瑾がないとは言えないものの、学界初の本格的な人物事典であり、その学術的意義は計り知れないものがある。これほどの大事業を単独で成し遂げんとしている著者に心から敬意を表するとともに、続編の編集・刊行が順調に進捗することを期待してやまない。最後に、本書評では、著者の地理学史観や学史像が明示的でない点について批判めいたことも述べたが、「地理学者」および「地理学的業績」を定義する難しさは誰もが認めるところであろう。近代日本地理学史像の構築という課題は、独り著者だけでなく、私たちにも突き付けられているものなのである。その点を忘れてはなるまい。

（柴田陽一）